

Stereo Sound

REVUE STEREO SOUND EDITEE A TOKYO

No 89, hiver 1989

気になる男たちに会いに行く

—— 傳 信幸

ハーベスとトーレンス・ジヤンムーラー いたいどんな人たちがつづっているのだろう

いつも元気なぼくの好奇心がムクツと頭をもたげ、ふたりのスピーカー・エジニアに会いに旅に出た。

旅は、時差にもてあそばれて、狭いシートにつめこまれ、いつも体がクタクタになる。途中で、もうこんなツラいのはうんざりだと思うのだが、しかし、いつのまにか忘れて、また出かけてしまう。体にはさつくても、知らなかつたことを知り、人に出会う——そういうぼくの好奇心だけは、いつも元気なのだ。

さて、この1年ばかりのあいだに、いろいろと聴いたスピーカーのなかで、ぼくがオヤツと思ったものが二つある。ぼくはこの5年ばかり、コンデンサー型などのスピーカーを紹介するのに熱心なのが、しかし、そのスペースアクターの悪さ、鳴らしにくさに関しては、誰にでもすすめられるものではない。コンベンションアルなデザイン——つまり、エンクロージュアにドームやコーンのユニットをつけたスピーカー——で、ダイポール型の聴き心地にすこしでも近いものが感じられるスピ

一カーに出会うと、オヤツと思うわけだ。まずはハーベスのH.L.コンパクトがそうだった。ハーベスの場合、デザイナーが設立者とは変わったこともあつた。同じくイギリスのスピーカーメーカーとして似たようなスペンドールは、設立者でありデザイナーのスペンサー・ヒューズ氏が5年ほど前に白血病で他界してしまい、以来、息子のデイレック・ヒューズ氏が受け継いでいる。

ハーベスの場合、高齢のダッドリー・トーレンス・ジヤンムーラー

フランス風の小さな街に
日本のスピーカー工場の
縮小版があつた……。
すごい設備だ。

トーレンス・ジヤンムーラー

から北部はドイツ語圏で、ここローランヌはフランス語圏だ。それもそのはずで、夜になるとあかりがはつきり見える対岸はフランスだつた。

そしてローランヌからジュネーブのほうへ向かって、レマン湖ぞいに西へ30分ばかり、フランス風の小さな街オーボンヌに着いた。ローランヌは、スイス風ともドイツ風ともフランス風ともつかぬ街に、ぼくにがしひれるほどだ。先ほどまで周囲の景色を占領していた高地特有の松林が今はもうんどん降下を始める。気圧差でツーンと耳がしひれるほどだ。先ほどまで周囲の景色を見てきたのはワインヤード。やがて目の前にはレマン湖が広がつた。

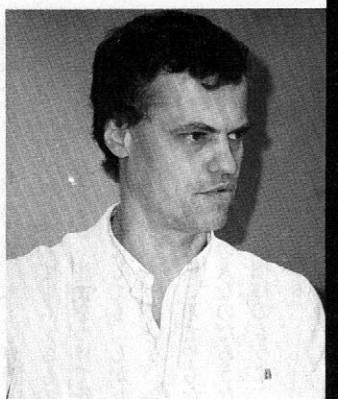
湖ぞいの街、ローランヌに着くと言葉が一変した。今朝がたまでいたスイスの中

ハーヴィッド氏からうけついだのがアラン・ショウ氏という。それ以前のイギリスのオーディオ界ではぼくの知らぬ名前の人だ。どんなスピーカーになるのか？ 一抹の不安をのりこえて、H.L.コンパクトは、きれいなステレオイメージと、やわらかな音楽的表現を聴かせてくれたものだった。そうなると、どんな人が作っているのか会ってみたくなる。ぼくの好奇心がムクツと頭をもたげるのだ。

そしてトーレンス・ジヤンムーラーだ。白い陶器の肌ざわりを感じさせるすがすがしさ——これは他のコンベンションアルなデザ

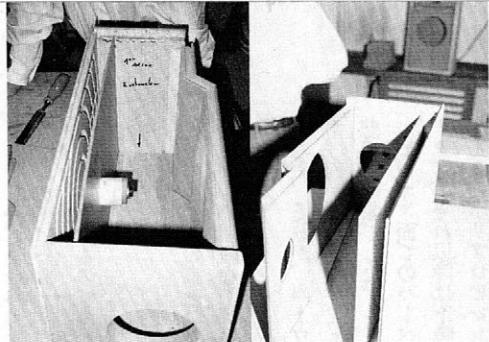
インのスピーカーではちょっと聴いたことのない——をもたらしたスピーカーで、オヤツと思い調べると、砂入りのリアバッフルをもつ複雑なエンクロージュア構造、あるいはユニットを支えるピンの存在。そうした入念な造りとセンス。やはり、どんな男が作っているのかと興味が増した。断片的に入つてくる情報をつなぎあわせているよりも、直接、当人に会つてみたほうが早い……。

こうしてぼくは各地の気温を調べ、それに会つた服をラゲッジにつけ込んで、そして旅に出た。



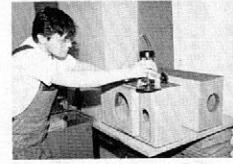
ジャン・ムーラー氏

とため息をつくことになる。到着したのは、トーレンス・ジヤンムーラーの工場で、外にロゴの書かれたパンが止まつていなければ、ちょっと大きめな家としか思えなかつただろう。その家に見えたところが実際には工場だったので、ヘエ——と思つたのではない。工場内部の設備に、ぼくは驚いた。

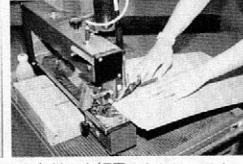


精密に前加工されたエンクロージャーの部材を組合せると、それはまるで吸い着くように組上がる。この写真から、リアパッフルが二重構造になっているのがわかるだろう。このあいだに砂が入れられるのだが、聴感上のSN比の向上のためだろうか、内部にエアクッションも貼ってある。

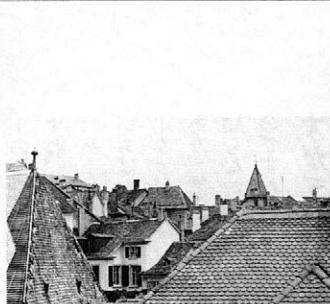
合板やチップボードの木口にツキ
板を貼る機械



▲ツキ板のハミ出した部分をカットするにも専用工具が使われている。



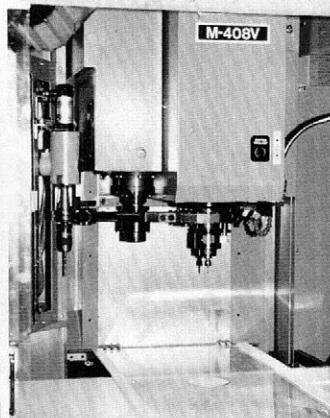
▲これはツキ板用のミシン。こんな作業まで自社でやっているとは、ほんとうに趣味で作っているともいはれない。



▲デザインルームの天窓を開けたら目の前にオーバンヌの家並みがひろがった。



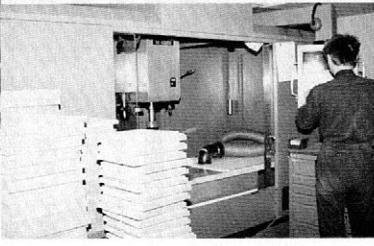
▲壁の色が白っぽく見える2~3階の窓6個分と1階、地下がジャン・ムーラーの工場兼住宅。工場は地下から3階部分までで、屋根裏にはデザインルームと無響室(まだ製作中だった)がある。



▲アームが動き次々とドリルやルーターの可動部をとりにゆくと下へ伸びてゆき、またたく間にパッフルが仕上がっていった。ちなみにこの工作機器は日立製。



▲ジャン・ムーラーはフランス語しか話さないので五ヶ国語に堪能なトレンスのアーミン・グラーフ(中央)が通訳してくれた。



初めてトレンスのジャン・ムーラーのスピーカーを聞いた時、今までちょっと他のスピーカーでは聞いたことのない、研ぎ澄ませて清々とした音、それに複雑なエンクロージュアの造りに、いったいどんな人が、どんな設備で、このスピーカーをつくったのだろうかと興味がわいたものだった。今、その興味を満たす現実が、目の前にある。

あれは何という種類の工作機械なのだろうか。コンピューター制御のドリルとルーターというミゾを彫つたりする役目を複合させた工作機器が、入口を入れてすぐのところにドンと置いてある。白衣をまとめて現れたジャン・ムーラー氏が、さっそくデモを始めた。

スコーカーとトウェイターをマウントするバッフルの元になる板がセットされると、機器のアームがウイーンと動いてドリルを選択する。ヒューンと回転音を上げた歯が板に穴を開ける。次いでアームは他のドリルを選ぶと、ちがう大きさの穴をほかのところにあけ、今度はルーターをとりだすと、ミズを彫つたりざぐりを入れる。

そのとなりでは、板の「こぐち」(板の厚みの部分/切断面)にツキ板を貼る機械が働いていて、左から右へ板を機械に通すと、リボン状のつき板が貼られて出てくる。さらには、板の表面に大きなつき板を貼り、ドンとプレスをかける機械——などなど。ぼくはこうした自動の工作機器を初めて見たものだから、そのために驚いているわけでは、決してない。たとえば、パイオニアやJBLやダイヤトーンなどのスピーカー

一工場で、とうに見学したことたびたび。ところが、どうして驚いているのかといふと、ここレマン湖ぞいのフランス造りの小さな街(村と言つたほうがいいか)に、ダイヤトーンの工場の縮小版が移転されたよう思つたからだ。それに、縮小版と言つても、月産数千本を作るという工場ではない。なのにこの設備だ。

本来エンクロージュアは、木工を専門とする工場に依頼すれば作つてもらえるものだ。もちろん、口うるさく注文をつけて仕上げをさせる必要はあるにしても。しかし、ジャン・ムーラーは自分でやつていて、きっと彼は、なんでも自分のところでやらなければ気がすまないタイプの人なのだろうなあ、と思った。このことは拙稿のもう少しありとより明確になつてくる。

精密につくるために あるスピーカーを、 自動工作機が集められた。

見学は続き、エンクロージュアを構成する各板を組み立てるところ。段差のついたバッフルは側板にこのようにはまって、そしてこれが板ですが、この後面には砂を充填するので当然二重構造になりますから、この板が内部で、こんなふうに側板にくい込んでいます、とそれぞれの板が組み合わさつてエンクロージュアになる様子を説明してもらつた。しくみはなるほどとわかるのだが、でも、なぜ先ほどのように、各板を執拗なまでに自動工作しているのかたずねてみた。するとジャン・ムーラー氏は眼光するどい目でぼくの目を見たまま、うん



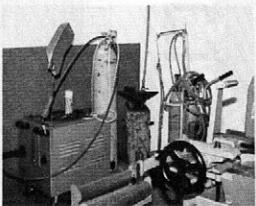
ため息が出るような素敵な雰囲気のリビングルーム兼リスニングルーム。奥様のクリスティーヌのセンスが發揮されているのだろう。JM325D/MKIIの中央に置かれたパワーアンプ(筐体式)はフランスで人気のある日系人ジャパン平賀の設計製作によるもの。



▲ローバス、ハイバスが分割された巨大なネットワーク。せん盤一台を専用に使って、ゆっくりと線材にストレスを与えるよう巻かれたウーファー用のコイルは、こんなに大きい。



▼屋根裏部屋の一部は「デザインルーム」として使われている。◆屋根裏にはこれから無書室を作ろうと準備を進めていた。

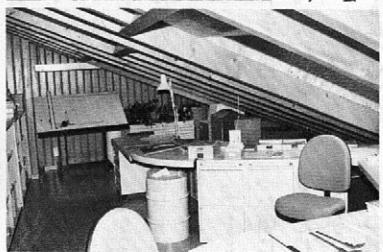


▲アンティークな家具をオーディオラックとして使っている。CDもあるにはあったが、聴かせてくれたのはすべてアナログディスクだった。

▲酸素と電気、両方の溶接機があるので何に使うのか聞いてみたところ、フロントグリルの骨組みを溶接するためだという返事が戻ってきた。



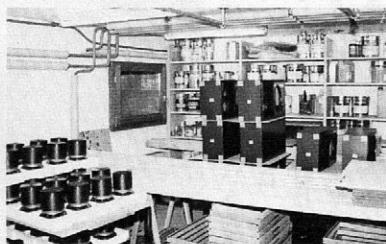
▶エンクロージュアの塗装も自社でやっている。これはその塗装ベース内部。7種類の仕上げに対応できる用意があるそうだ。後ろの黒く四角い穴は、スプレーされたよけいな塗料を吸い込む排気孔。



七と八二



あびた・奥



▲地下には塗装ブースが設けられており、エンクロージュアやフロントグリルのワク組などの塗装まで自社で行なっている。ブースの反対側は各種塗料が棚に整然と並ぶ。



▲JM325D/MKII用のミッドレンジユニット。バックキャビティ用のカバーは二重構造で、間にダンピング用の砂が詰めこまれている。

・ミツチエルにどこか雲囲気の
似た（わかる人はわかるだろう）
とびつきりの美人だが、残念なが
らあまりいい写真がない。

この取材のとき、ジャン・ムーラー氏の話すフランス語を英語にする通訳の役目をしてくれたのは、トーレンスのマネージング・ディレクター、アーミン・グラーフ氏だった（氏については中矢先生のペ恩による本誌84号の記事を御参照いただきたい）。そのアーミンが言う。「ジャン・ムーラーとトレーンスとは87年からビジネス面で関係するようになったのですが、それ以前はスイス国内の販売店だけ、たった8店に出荷していただけだったのです。ところがでですよ、私が初めて、この工場を訪問した時

見学は続く……。
とにかく尋常ではない。
しかも最後に、とどめが
待つていた……。

に、この自動工作の手法をとったのです」
なるほど、手作業で仕上げたエンクローゼ
ジユアの部材は組み上げても、幼稚な構造だ
だった。もちろん芸術的な職人芸の手仕事
ができるのだろうが、その時、スピーカー
の価格はほとんどないものになってしまう
だろう。

「とうなづいてサンプルをとり出した。」
「これは試しに手造りで加工したエンクロージュアの各部材です。これらを組み合わせると、ほら、こんなぐあいで、私の求める複雑な構造には対応できませんね。慎重にコントロールした自動工作機ですと、ここまで追い込めるのです。もちろん手仕事では、美術工芸品を作るレベルであれば機械ではありません。けれど私は、工芸品と量産品とのはざまにあるスピーカーのエンクロージュアの部品、音響部品にこだわって、

ジャンヌーラーは
オリジナリティを大切に
する完璧主義者。
彼の最後の言葉に、
ぼくは小さく笑つたけど…。
さて、驚いてばかりいられない、氣をと
り直してインタビューを始めなくては。ま
ず昔話から。

していた。同行していた編集部のM・Iも目を点にして、ポツリとこうもらした。「この人、納入されたユニットのマグネットをいっただ消磁して、自分で着磁しなおすくらいのことをしないと気がすまないんじやないかなあ……」。

そして、最後にとどめがあつた。最上階のドアを開けると、ボカつと大きな空間が広がつた。

「ここは近い将来、無響室を作ります

に見たのは、このすさまじいほどの設備投資でしょ、尋常じゃありませんよ。ぼくは彼に、さかんにクレージーだと言つたものでした」

こういう元韓王主義
ないだらうな、とば
ん。奥様のクリスチ
ヤーニョビやチーズのは
つまみながら、甘口
ながら、話が続く。

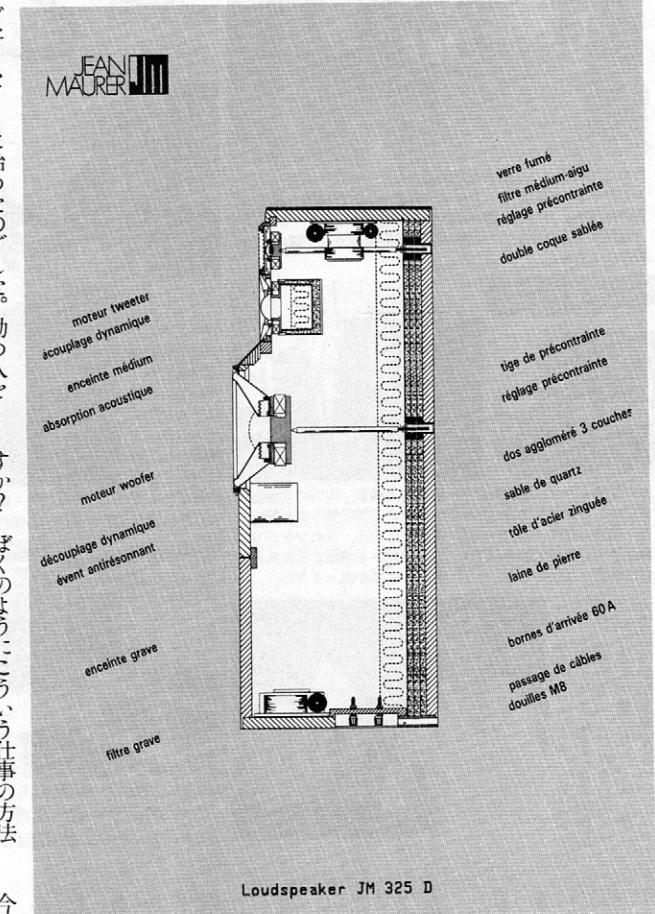
大幅にとりいれる。高品質を維持するこ
とをとつてゐるのはアーミン(アーミー)
がたいへんでした。横からクリスティーヌ
がいい仕事をしていねいな仕事をし
は買えますが、しかし毎月ものすごく払
うのよ」と口を出さ
「アーミン(アーミー)が
つた頃には、ぱく
さかんにクレージー
でもこれがぼく
日本の製品の造り

イスでは、他にはあま
基本姿勢は、機械化を
ことによつて、小人数で
ことです。ただし、機械
かし人は——根気よくて
してくれる人——選ぶの
イースが、機械の月賦を
つているのよ、たいへん
ミン・グラーフ氏）と会
のやり方をみて、彼には
一だと言われましたね。
のやり方です。たとえば
れ方、そのクオリティイ

これは趣味の
すからね。妻
緒に働いてく
何を作る場
満足する仕事
家兼工場の
を移した。ぼ
たので、クリ
「彼はいつも
めて、それを
のために私達
すけれどね」
彼の年齢?
年40歳。まだ
とおじいさん

一環としてやつて いることでの協力もあります。いつも一
合にも同じだと思うのですが、をする——これですね」
そばにあるレストランに場所
くのとなりの席に奥様が着い
ステイースにもたずねてみた。
オリジナリティを大切に見つ
地道にやっています。でもそ
く、休暇をあまりとれないので
笑え。

A black and white photograph showing a person's legs and feet walking on a paved surface. The background shows a building with large windows. On the left side of the image, there is vertical Japanese text.



Loudspeaker JM 325 D

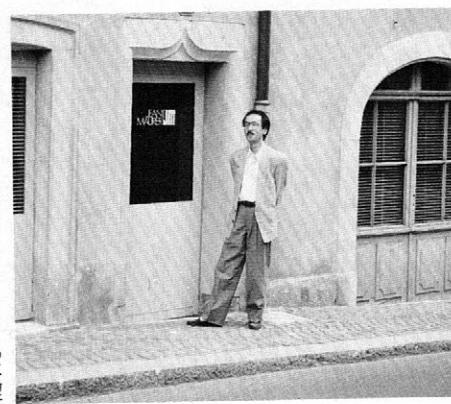
×-×ゴリラセンターが書き出したIM325Dの断面図

ントロールはパーソナルですね。ぼくのやっていることと方針は同じだと思います。それにプラス、小さな会社はこまわりがきく。これは家族ぐるみでやっている仕事です。

このローランスの周辺にやつてたのです。私?ええ私はこの近くで生まれ育ちました。

ここはスイスのフランス語圏ですが、この一帯は工業地ではなく、大会社や大工場はドイツ語圏にあります。ですから私達の住つて、るスピーーカーの素才も、ほとんどの

STEREOSOUND 488



スイス・オウボンヌの街の一角、ジャンヌー工業兼
自宅前に立つ筆者。この何気ないドアを開けると……そこ
はまさにスピーカー・ワンドーランドだ。